

## 遭難者三〇〇〇〇〇

中国の旅、一番期待していた南京に着いても、中国の案内人は意識して、あの日本軍虐殺記念館を外していた。だから、ツアーを離れ、孫と二人でその現場に立った。横に広がる大規模の正面壁いっばいに、「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館」の大文字。予想もなかったことに、肅然、胸をしめつけられる。さらに隣の壁に、「遭難者三〇〇〇〇〇」。零の数を確かめ直す力もうせ、ただ頭をたれて館内に入る。日本では、この虐殺があった、いやなかったというレベルで議論されていることに、中国側は心底驚いた。これは歴史上自明の一大事実、その証明として南京城外十数カ所の大虐殺現場に慰霊碑を建てたのである。その一つにこの記念館があり、無数の証拠物件が展示されている。

館内は暗い。虐殺の証拠写真はなお暗たん凄惨<sup>せいさん</sup>。目がなれるにつれ、幾千の画面が鬼気迫る。許して下さいっ！ 心の中でわびつつ泣きつつ、居たたまれない思いに促されつつ移っていく。妊婦のお腹に銃剣がささり、腸が流れ、真裸の子供たちが小山

のように折り重なる。四人の青年が首だけ出して生き埋め、口と目は閉ざされたままだが、無念の怨恨を白面の相が告げ続けている。

私たちのほかに、中国の娘さんらしい人がひとり。彼女は泣いて、つぶやきつつ、写真に相對しては次に移っている。まるで遺族かのように。もはや私は正視できない。お前だっ！日本人だっ！声高く責めののしられるのと違って、静寂の中の呵責は榨木となつてわが魂を絞り続ける。

記録映画が始まるというが、孫に見せるに耐えず、やっと館外に出る。長い時間だった。しかし真夏の太陽はまだ真上にある。二人はずっと無言だった。帰国してから、孫は母に言った。「あの映画見るべきだった」と。その言葉を私は幾度も胸にくり返した。

(一九八九年一月二十六日)